生活科部会（小学校）

県研究主題 具体的な活動や体験を通して気付きの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　齋藤　美紀（湘南三浦地区）

＜研究主題＞ 一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための授業展開の工夫・改善 －思いや気付きの質を高める様々な学習活動の工夫について－

１　提案内容

生活科が大好きな児童に、これからも実物に触れ、よく観察し多様な表現を通して交流し、気付きを共有することで学びが広がる授業を考えていきたいとの思いから「思いや気付きの質を高める多様な学習活動の工夫について」というテーマを設定した。

（１）思いや気付きの質を高めるための手立て

①　音（具体的なもの）から入る学習へのきっかけ作り

具体的なもの（家族の仕事の音）から入ることで、物事を見る視点を明らかにした。夕方の音探しは平日、朝や昼の音探しは休日に２回に分けて行った。また、決めた日以外にも音探しを取り組んでよいことにした。

②　活動の可視化による学びの共有

探してきた音をカードに記入した。朝・昼・夕方の家での仕事に分けて一覧表にした。また、父、母など人によってカードの色は変えた。調べてきた事を可視化することで、一人ひとりの学びが共有され、気付きの質が高まると考えた。

③　多様な表現方法の活用による主体的な学習活動

家の仕事の音調べから、もっと調べたい仕事に絞ってグループで調べる計画を立てた。調べたことをまとめる活動ではグループで話し合い、ペープサート、紙芝居、クイズや劇などいろいろな表現方法を選べるようにした。

④　児童の思考の流れに沿った授業展開

調べたり聞いてきたりしてきたことを交流する中で、児童の気付きや思い、願いから次の小単元へつながるようにした。ワークシートに書かれた一人ひとりの考えや気付いたことをできるだけ把握しながら学習を進めた。

⑤　体験活動

「じぶんの音をつくろう」では、児童が家の仕事をチャレンジする活動に取り組めるようにした。自ら家庭の仕事に取り組む体験活動をすることで新たな気付きを得られると考えた。

（２）成果と課題

①成果

ア　児童の思考の流れに沿った学習展開

家庭の仕事の音探しから、詳しく仕事を調べたり発表したりする活動に児童は終始意欲的に取り組んでいた。保護者から「進んでお手伝いをしてくれるようになりました。」という声が聞かれるなど、児童の気持ちや行動に変化が見られた。

イ　活動の可視化

調べてきたことを可視化することによって、最初は仕事でない音も混ざっていたが、仕事の定義が児童たちの話し合いでできた。また、「いろいろな仕事がある」といった気付きから「家族のための仕事と自分のための仕事がある」といった気付きの質の高まりが見られた。

ウ　多様な表現活動

表現方法が児童の話し合いによって決定されることで主体的な活動にすることができた。発表会では「またやりたい」などの声が聞かれ、児童は充実感と自信を得ていた。

エ　体験活動と家庭との連携

家でお手伝いをしたこと（体験活動）で、児童の振り返りに家族の一員として意欲的に生活しようとする姿が見られた。また、家の人から手紙を書いてもらったことは、家族の一員としての自分を見つめ直す（自分の成長を実感する）機会にもなった。

②課題

ア　視点の重要性

グループ発表では、「相手に伝わるような声を出す」など国語的な視点を初めに確認してしまったため、気付きも国語的になってしまった。視点を明確化することで学びを共有する際に、気付きの質を高めると改めて実感した。

イ　職業としての仕事の音の取り扱い

お父さんがパソコンを打つ音など、今回は取り上げなかったがどのように扱うべきだったかについては課題が残った。

ウ　家の手伝いを通して、家族の一員として意欲的に生活しようとする姿は見られたものの、規則正しく健康に気をつけて生活するというところまでいかなかった。

２　協議内容

（１）　音（諸感覚）を生かした学習展開

音から入る学習展開がおもしろい。音のない仕事に気付いている児童がいたようなので、自分の音を作る活動にも考慮して、もう少し活動内容を広げても良かったのではないか。

（２）　体験から気付きへ

仕事の手伝いを楽しむ子はたくさんいるが、そこから家族の一員としての自覚につなげることが難しい。児童の思考に合わせた学習展開とそれぞれの活動での気付きの共有が「楽しい」だけでなく、家族の一員としての自覚を深め、これからもお手伝いしようという思いにつながっていた。

３　まとめ

（１）学習のきっかけの工夫

音への着目も素晴らしいが、前年度の活動をそのまま踏襲するのではなく、目の前の児童の実態から活動の入りを変えたという発想が良かった。

（２）体験と表現活動が相互に作用する生活科の学習展開

生活科は、体験と表現活動を一つのセットとして、相互に繰り返し作用して児童の願いや思いが実現されるようなイメージをもって学習展開を考えるとよい。

提案２　　提案者　前園　兼作（横浜地区）

＜研究主題＞ 一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための授業展開の工夫・改善

１　提案内容

（１）児童の願いでつなげるカリキュラム・マネジメント―生活科で育てたい力　生活を豊かにしていく力－

①　児童の願いを見取る･引き出す・高める

児童の願いを引き出したり、高めたりしていくことを大切にした単元作りをすることで、願いの実現に向かう「活動や体験」と「表現」の相互作用が生まれる。

「商店街を探検したい」（好奇心）→「ミニ店員さんになりたい」（願いの実現）

②　資質・能力を発揮する姿を想定する

学びになるかどうかの判断は、児童が資質・能力を発揮する姿を想定できるかどうかで見極めることが大切。

③　児童の願いから学びを見直し、改善する

年間計画や単元計画は、児童の願いに沿って柔軟に修正を加えていく。

（２）成果と課題

①　国語の春探しで商店街を通った時、「商店街にも春がある」という児童の声をきっかけに商店街探検が始まった。探検を通して商店街のことに詳しくなったり、店の人と仲良くなったりしたことを価値付け、児童の願いが膨らむような教員の投げかけをすることで活動や体験場面が探究的になり、表現場面が協働的になっていった。

②　児童の「商店街を盛り上げるおもちゃの縁日を開きたい」という願いを実現させていく中で、生活科の内容（３）だけでなく、他教科とのつながりなど様々な学びがつながることで、生活科の目標に様々な視点から迫ることができ、活動が一層充実していった。

③　「活動や体験の充実につながる表現」を整理して、教員の手立てを工夫していきたい。

２　協議内容

（１）質疑応答等

・願いを引き出す価値付けがしっかりされていた。

・同じ学年の教員との相談はどのようにしているのか。

→それぞれのクラスに応じた活動内容を行い、学年で報告している。また児童の新たな考えが出てくるたびに相談し合っている。特に「願い」までいっていない児童の思いをどう膨らませていくか考えている。

・ストーリー性のある単元だった。評価の仕方について教えてほしい。

→児童を見るときの視点（資質・能力）カードなどを用いて評価をする。児童の姿やエピソードなども記録に残すようにして、小さな変化に気付けるように心がけている。

3　まとめ

（1）研究校の取組。学習とともに精度があがっている。学習指導要領に準拠してテーマの設定、教員の願い、育てたい資質・能力、評価計画などがされている。活動とその活動の価値付け・共有が繰り返し行われている。

（2）生活科では、単元と単元のつながりや関係を意識することが大切である。また、他教科との合科的・関連的な指導の一層の充実を図ることが求められている。今回は、内容の（3）（4）との関わりを通してストーリー性があった。

（3）生活科は３年生以上の社会科・理科・総合的な学習の時間・図画工作・音楽等につながるものなので、それらの学習との違いや関連を理解しつつ、生活科のねらいを実現させていくことが大切である。

4　協議の柱に即した協議　【学習意欲を高める学習指導の在り方】

（1）児童の声で単元の進め方を柔軟に変更することはよい。また、教師同士の情報交換は児童の意欲につながる。児童の好奇心から始まり、願いに迫っていく姿が知りたかった。

（2）繰り返し学習を行う。一つの公園に行くことで四季を感じられる。発表の場づくりの大切さを学んだ。

（3）生き物単元は、学校環境の事情等がありなかなか飼育できない状況のところがある。その学校や児童の状況に応じた身近な生き物の世話をしていく。生き物との出会わせ方、見取り方が大事である。また毎日関わることを通して、生命の尊さを実感することが大切である。

（4）材との出会いについては、地域性を生かすことや他教科・他の学年とのかかわりから児童が主体的に学べるように工夫する。入学してからどんなことに関心があるのかを把握することが大切である。

（5）児童の思いや願いを大切にして、繰り返し取組むことが重要である。そのためには、児童との関係作り、地域との連携、児童の思いや願い等活動内容を可視化すること等が必要である。

（6）児童自身が自己決定することで責任が生まれ、取り組むのではないか。個として認めてどのように伸びたのかを具体的に伝えてあげるとよい。

（7）ワークシートについては、書く作業で負担になる子がいる。マンガのような書き方がよかった。児童の思いにつながるワークシートを意識したい。

5　全体のまとめ

（1）クラスの児童の様子やどういうところに興味・関心があるか等、実態に沿って活動の内容を組み立てていた。

（2）学習意欲を高めるためには、児童が「おもしろい」「やってみたい」など気持ちが揺さぶられるような授業の内容を組み立てていくことが大事である。児童の願いをつなげる体験を繰り返していく中で、「もっとこうしたい」「不思議だな」という思いが生まれ、さらに体験の広がり、深まりが見られ、気付きの質が高まっていく。そこで教員は、児童の新たな気付きにつながっていくような意図的な言葉がけが大切である。

（3）児童の体験的な活動を重視した学習を実施するため、校外学習、地域の人との交流、公共物の利用等教育環境の充実を図ることも大切である。

（4）内容（2）（9）については、家庭と密に連絡を取り、活動の主旨を理解してもらい、互いに児童の成長をみとる機会となるよう発信していくことが大切である。その際、それぞれの家庭の事情、特に生育歴や家族構成等に十分配慮する必要がある。